



長年付き合っていた彼氏とも、去年別れてからは独りだ。

独りは————嫌いじゃない。

仕事も別れてから、すごく順調だ。今は企画部の主任を任せられている……充実していると思う。

でも、このままだと思うと————時々、不安になる。

あいつの別れ話の最後に言われた一言を思い出した。

「お前は独りでも生きていけるよ……強いから」

あの時の言われた一言、否定もできなかった。

そして、別れた直後も涙は流れる事もなかった。

そのままいつもの生活へと、私は流された————なるほど、私は強いのかもかもしれない。

「主任っ、主任ってば！！」

「っえ！」

「何、ポーとしてんですか？」

部下に話し掛けられている事に気づかなかった。

一瞬、何故だかわからないが意識がもうろうとしていた。

心配そうな顔をこちらに向けて、まだ話続けてくる。

「らしくないっすよ」

心配そうな部下が私ほうとうしくなり、彼から用件を訊き出す。

「ええ、心配ないわよ。何、何か用があるんじゃないの？」

「ああ、そうでした。コピーしてきましたよ。はい、これ」

私は素っ気なく、彼から分厚い紙の塊をすぐに受け取る。

「ああ、これね」

「あと部長、呼んでましたよ」

「そう……」

いぶかしげに首を傾けながら、彼は私のデスクから、離れていく。

受け取った資料を自分のデスクの上に置き、イスから立ち上がると私は部長のデスクの方へ急ぎ足で向う。

「部長なんですか？」

「今度の企画も君に任せるよ。しっかり頑張ってくれよ」

「はい、有難うございます」

また、今回も仕事を任された。やりがいのある仕事は、打ち込めるからホントに嬉しい。仕事に打ち込んでいるときは、余計な事を考えなくていいからだ。

デスクに戻って来ると、若い女に話し掛けられた。

若いだけあって、私より色が白く女としても艶やかで、それでいて一点のシミもない美しい肌だ。

そして、何より計算高い女。

彼女は私のアシスタント。長年アシスタントとして仕事をしているせいか、最近、内心でくすぶっている様だ。

「また主任、仕事任されたんですね。彼と別れてからずっと、仕事してますよね？ 身体疲れませんか？ あたしい、心配だなあ。いつでも変わりますよ、お仕事」

皮肉交じりの言葉と不敵な笑み。心配を装いながら、主任の座を狙っている女。

「大丈夫よ……………身体なら。余計な事言わないで、仕事したらどうなの？」

なんで、一年も前に別れた事、今、引っ張り出すのよ。  
ホント…… 余計な事しか言わない女。

「そ、そうですよね」

「それと、今から営業に出るから、帰って来た時までに今回の企画資料に目を通して、資料まとめておいて」

「わかりました、やっておきます。また、あの会社に行かれるんですか？」

「そうよ、何か問題でも？」

「————いえ、ないです」

何かに感づいているのか、めざとい女と、頭で思いながらも冷静に彼女に話続ける。

「行って、そのまま直帰するから。あとお願い」

今から会う人間は企画を持ち込んできた取引先の私より年下の男性社員。

何度か仕事で会うようになった時、向こうから好意がある事を告げられた。それまで、私的な事は一切話した事はなかった。

この私に憧れている、なんて真面目な顔をして繰り返し何度も言われると、悪い気はしない。必要にされているような気がして嬉しかった。

そんな彼に少し惹かれている自分がある。

「あの、今日食事しませんか？ 企画が通った訳ですし。もちろん、あなたさえよければですが」

企画の打ち合わせが終わると遠慮しがちに彼は私を誘った。

もしかしたら、あまり女を口説いた事がないのかもしれない。

瞳にはその姿がなんだか可愛らしく映った。

私は快く彼の申し出を受け入れる事に。

「いいですよ。行きましょうか」

久しぶりに二人での食事は楽しかった。

そろそろ、こういうのもいいのかもしれないと、そんな事を思いながら、私は家に帰り着く。

お酒のせいか、ベットの上で心地よい気分のまま、ここ何年ぶりかの深い眠りについた。

翌朝、久しぶりに爽快な朝を迎えられた。私はその気分のまま会社へと出勤。

「なんだか、顔色いいですね。いい事でもあったんですか？もしかして、男でもできました？」

「……仕事なさい」

この女一、本当に余計な事しか言わない。

「すみません」

「わかったなら、仕事なさい」

私にそう言われると、アシスタントはそそくさと気に食わなさそうに自分のデスクに戻っていく。やっと、仕事に集中できると、胸をなで下ろした。そして、部長に頼まれた新企画に取り組む事にした。

企画は順調に練りこまれて、久々に時間通り仕事を終了する事ができた。

今日は久しぶりに時間通りに家へ帰れる。たまには飲みにも行くか、そう思うと、私はいつも飲みに行くバーへと、ひとり軽やかに足が向くのだった。

バーは相変わらず、私にとって居心地のよい場所だ。

カウンターに腰掛けると、マスターがいつもの様に私の好きなカクテルを何も言わず、ただ優しく微笑んで出してくれる。

ここは私にとってオアシスの様なもの。

いつもカラカラに干上がった砂漠の様な心を潤してくれる唯一の場所。

バーでのひと時を過ごした私はほろ酔い気分で家に帰る途中、偶然か、必然か、思いもよらない形で、ある若い男女にでくわしたのだった。

「あっ主任、こんな所で奇遇ですね」

アシスタントの後ろには取引先のあの男がバツの悪そうな顔をしてうつむいていた。そんな事には気にもとめず、女は嬉しそうに私に話かけ続けてくる。

「主任と彼って、全然釣り合わないですよ。彼じゃ若すぎませんか？ それに今時、男と女が食事だけなんてありえませんよ」

「だったら何？ そんな事……貴女に関係ない事でしょ」

「そうですね。でも——中坊でもやる事やっていますよね。だから、彼がかわいそうで、あたしが主任の変わりに仕方なく、相手してあげたんです」

「——そう。言いたい事はそれだけなら、もう行ってもいいかしら」

「主任ってずるいですよ——そうやって、いつもすかした顔して、興味ありませんって言う様な感じ。見ていてイラつくんですよ。だから、全部奪いたくなっちゃった、あたし」

私は背中越しに彼女の言葉を聞き流そうと歩きかけていたが、彼女はさらに追い討ちをかけたのだった。

「彼とは身体の相性がよかった——ただ、それだけの事」

振り返った私をみると、女は小悪魔のような微笑みで男に返事を催促する。

「——だよな？」

ただ男は言われるがまま、小さくうなずくだけ。彼にあった好意はもう私の中からは消えていた。

「そう——失礼させてもらうわ」

そう言うとその場から逃げるかのように、静寂の中を行く。暗闇をただ黙々と私は歩いて帰宅したのだった。

どこをどう歩いて帰って来たのかはよくわからなかった。それは昨日の彼女達の事がショックだったからか、風邪気味で意識がもうろうとしていたからだったのかは不明。

ただ、翌朝起きたら身体はだるく体温を測ると37・8度だった。吐き気に脳天を貫くような頭痛もするので、何年ぶりか忘れたが会社を休む事に。

全ての事が最悪だった―――心も身体も。

この空気が冷え切った誰もいない部屋で寝ていると、時間の感覚が麻痺する事がよくある。

そして、今も何時なのかが――わからい。ベットから目の前のカーテンを開けて窓の向うを見る。もう外はとっくに夕刻を過ぎていた。

何も食べずに寝ていたの、仕方なく食事を調達すべく、身を震わせながら冬空の下近くのコンビニへ向かう。

一人暮らしでは頼れる家族もなく、友人はみんな結婚していて自然と頼る事もなくなった。

こういう時、ひとり身がすごく、悲しくて、虚しくて、孤独を感じる。

もう誰も私の事に気づかないんじゃないかと、思うくらいに―――

そんな事を思いながら、最低限の食料を買った私は張り詰めた冷たい空気の中を、ドテラにマスクをした格好で歩いていた。

予想もしていない出来事が私を襲った。背後から急に男の音が――冷たく固い空気にその音が混じると、一瞬だけ空気が緩むのだった。

「センパイ？」

聞き覚えのある太くてハツラツとした男性の声。

私は振り向くと高校の美術部の後輩が、そこに照れ笑いした様な、ハニカンだ様な顔で立っている。

「あれ、あんたは」

「はい。思い出しました？ センパイこの辺りに住んでるんですね」

「ええ。あんたこそ、なんでココに？」

「引っ越して来たんですよ。この間」

「そう」

「風邪ですか？ 大変ですね、荷物でも持ちますよ？」

そう言って、たくましくなった後輩は有無を言わず、私から手の荷物を奪う。

私の前を歩き始めた。その広くたくましい背中は大人の男を感じさせ、あの頃の頼りない少年の姿をすっかり消しきっていた。そして、あれから時が流れた事に気づかされるのだった。

家までの帰路、それっきりお互い、何も語らず黙ったまま歩くだけ、懐かしさのせいなのか、彼との沈黙は苦にならなかった。

それ以前に彼の隣はなぜか———心地よいのだった。

ふと、見慣れた建物が視野にはいると、自分の家に到着していた事に気づく。

「あ、ありがと」

「いいですよ、これくらい。いつでも手伝いますよ。それじゃあ、センパイお大事に」

彼の屈託のない笑顔がなんだか私を照れさせる。男性に親切にされ慣れていないんだ、そういうのに私はきっと免疫がないんだ。

そんな事を思いながら、彼が荷物を部屋の前に置いて帰る姿に視線が行く。

「ホントにありがとね」

私がお礼を言うと最後にまた彼はハニカンだ。

彼の姿が見えなくなると私は買い物袋を持って、部屋に入る。

食事を済ませて私はベットに潜り込むと先ほどのまでの孤独感を忘れていたのか、すぐに眠りにつく事ができた。



そして一一次の日会社では企画の事で部長に呼び出される。

「部長、何でしょうか？」

恐る恐る部長室に入ってきた私に、部長は私をさぐる様な言葉を投げ掛ける。

「体調はどうかね？」

「体は良くなっているとは思いますが」

「ふむ、そうかね」

「私を呼んだのはこの事でしょうか？」

「まあ、その、なんだねー」

不思議に感じた私の問い掛けに部長が途切れ途切れに答えたが、その後続く台詞も歯切れが悪い。

「まあ、聞く所によると、だね……君、最近疲れているようだね」

「いえ、そんなことはー」

一瞬の躊躇もなく答える私に部長はなおも食い下がる。

「しかし、昨日休んでいただけろう？」

「はい、でも少し体調を崩しただけなので、体の事をご心配には及びません」

「ふむ。まあそれとだね、君の部下が頑張って例の企画をまとめてくれたようでね」

部長の言葉と共に突如として部長室にあの女が何か手に持って入ってくる。

「部長！ これで今回の企画書オッケイです」

一瞬の間を置いて彼女は私の存在を確認したのか、シレっと私に言うのだった。

「あれ主任、いたんですね？ 企画ならちゃんとできましたよ、ちょうど」

できるだけ私も彼女に対しての嫌悪感を出さない様に勤める。

「そう、企画書ありがとう」

「この際だから、明日から少しお休みになられたらどうですか？ ねえ、部長もそう思いますよね？」

彼女は何か含みを持つ様な仕草でより一層部長へ近づく。部長が彼女の行動にたじたじながらも答える。

「ちょうど、今、その話をしていたんだがね」

また小悪魔のような微笑を部長に向ける。そして、彼女の指は自然と部長の耳を優しく撫でる。部長は既に彼女の色香に骨抜きにされていたようだ。

「そ、そうだね。少し休みたまえ。確か有給が残っているだろう？ ここらで消化しときなさい。部長命令だ」

部長の傍で勝ち誇ったように微笑む女を見て、私はすべてを悟った気がした。それでも聞こえるか聞こえないかぐらいの声でつぶやいてみる。

「ぶ、部長……」

ただ、それ以上私の中には説得出来る言葉もなく、理解を示す言葉を付け加える事でしか、目の前の状況を理解せざるおえなかった。

「わかりました」

その場で答えるのに私は精一杯だった。  
私は上司に言われるがまま有給を消化するため、休む事になった。

休みなんて何もする事ないし……すると、珍しくチャイムが鳴る。  
私は不思議に思いながらも部屋のドアを開けた。  
目の前にはこの前の後輩が笑顔で立っている。

「センパイ、ご飯食べませんか？」

「えっ」

いきなりで私は戸惑ったものの彼の優しい笑顔につられ返事をする。

「いいけど、何食べに行く？」

「実はもうあるんですよ、おでんが。作ったのが余ったんですよね」

「ああ」

「これよかったら食べて下さい。どうせ、ろくなもん食べてないんじゃないですか？」

「う、うん。まあね。ありがと。食べさしてもらおうね」

「はあい、どうぞ、どうぞ」

その後も彼は休暇中の私に作り過ぎた晩御飯を届けてくれていた。

休暇はあっという間に過ぎ、気がつくとき最後の休み。

今日も私は夕飯の時間が近づくと窓から見えるオレンジ色に染まった空をぼんやりと見て、いつもの様に彼が来るのを待っていた。

そして、いつもの時間になるとチャイムがなる。ドアを急いで開けると彼は優しい笑顔を見せてくれた。

「センパイ、ご飯食べませんか？」

いつものハニカム笑顔、いつもの優しい声、いつもの聞きなれたセリフ、いつもの――この何日か彼の笑顔を見る度に私は心から癒されていた。

今の私には少なくとも彼の笑顔だけがこの世界での救いのような気さえしていたのだ。

「うん、今日はあがっていく？」

私の思いがけない言葉に彼は驚き、そして、いつもとは違う表情を見せると答える。

「い、いいんですか？ お邪魔して」

「ええ。別に、構わないわよ」

いつしか私は彼の笑顔をいつまでも見ていたいという欲を抱いていた。

「それじゃ。お邪魔します」

「どうぞ、適当に座ってて」

彼をみると部屋の中でかしくまった様な態度。そして、正座をしてからコタツの前に遠慮がちに座っている。

「入りなよ」

「ああ、はい」

私の目の前でガチガチに大の男が緊張している。

なんだかおかしな光景だな、と思いながら、彼に話かけるといろいろな事を話した。大学の時の事。現在の事。時間がどんなにあっても足りない位だった。

「もう、絵描かないんですね？ 俺、センパイの描くブルーが好きだったのに。美大に行くとはばかり思っていました」

「才能ないから。そーいえば、あんたいつも私にくっついてたよね」

「はい、センパイの描くブルーがすごくキレイで。だから、俺、今も近づきたくて」

「そう」

私はなんとなく悲しくなる。それは彼が好きなのは私の描くブルーで私じゃないという事が。

「もう、描かないんですか？」

「もう無理かな。そんなキレイなブルーは描けないよ」

そんな話をしながら、今日は彼が持ってきたご飯を独りではなく、彼と一緒に食べた。

「あっもう時間遅いんで帰りますね、俺」

時計を見て彼が言った。

私はもうそんな時間か、と思い彼に返事をする。

「ああ、うん」

私は彼を玄関まで見送るとお礼を言うが、

「ご飯、ありがと」

ホントは独りになりたくない、と心から思い始めていた。

「いえいえ。それじゃ」

彼はそんな事には気づかず、またいつもの屈託のない笑顔で帰って行く。

休暇が終わり、私は久しぶりに会社へと行く。

会社では私の企画だったのを、もうアシスタントのあの女が引き継ぎでいる。

私はただその風景を眺める事しか出来なかった。

仕事場がグラついている、いや目の前の風景が同じ様にグラついていた。

次に暗闇が私を襲う—————

会社のソファで意識を取り戻した私は自分の居場所だった会社にさえ、もう居場所が無くなったのだと理解した。

私はその足で早退を申し出ると独りで真っ暗な家に帰って来た。  
部屋の電気すらつける気力もなく、何も出来ずに時間がただ過ぎて行くのだった。

私は気がつくまで帰って来たままの格好で寝てしまっていた。  
顔には涙の後。

ふと何時なのか気になり、私は時計を確認すると昼過ぎの時刻を刻んでいた。  
倒れてから何も食べていない事に気がついた。

食欲はないがそれでも何か口にしなければと私はコンビニへと買い物に出掛けた。  
コンビニから出て来たのは後輩の彼と可愛らしい女性。  
私は彼らに気づかれない様に見えない所に思わず身を隠す。  
やり過ごすと、結局、コンビニには行かずに家へと帰って来た。

自分でもわかってはいたけど——それでもどこか彼に期待していた自分がいたから、  
……………ショックだった。

そこへチャイムが鳴る。

「センパイ、ご飯食べませんか？」

彼は彼女が作ったあまり物の晩御飯を私に毎日届けに来ていたのだろうか——私は馬鹿にされた様な気がした。いや、ちがう——勝手にそんな事を思い描いては彼に期待をしていた自分が許せないのだった。

玄関越しに私は涙と震える声を抑えながら彼に叫んだ。

「もう二度と来ないで、迷惑だから帰って」

「センパイ？ どうかしたんですか？」

何も知るよしもない彼の質問には答える事ができない。  
私は黙るしか出来なかった。

「わかりました。何があったのか、わからないですが今日のところは帰りますね」

彼の気配がなくなるとそれまで我慢していた物が一気に込上げてくる。

それは嗚咽まじりの声。私は暗闇の中で全てのを呑みこむかの様な勢いで、言葉ではない声を出して泣き崩れていた。

あの日からチャイムは鳴らなくなった。

元通りの生活に戻った――ただそれだけなのに家での時間が途方もなく長い。

ある休日、私はふと窓の外を覗いた。

目には一面銀世界が広がっている。キラキラ輝く真っ白な雪。

私には目が眩むほど、とても眩しかった。

真っ白な世界へ、ただ無性に飛出したくなる衝動が走る。

勢いで部屋を出たが、私はどこかわからない路地に積もった雪の上を彷徨い歩いていた。



————何処へ続いているかわからない道。

————何処へ行こうとしているのかわからない私。

彷徨っていた私に何か固いものが背中にあたる。

それは——小さな白くて丸い雪。

振り向くとちょっと離れた場所に鼻と耳を真っ赤にしている後輩の彼が立っていた。

「センパイ！　なんでココに？」

「あんたこそ、なんで？」

「ここの家の近くなんですよ。センパイの姿がみえたから。つい」

「そう。じゃあ、帰るね。私」

帰ろうとした私に彼は少し声を大きくしてたずねる。

「なんで避けるんですか？」

「別に避けてなんかないわよ」

背中を向けた私がしばらく黙っていると、彼が何か、ふっ切った様子で声を出す。

「センパイ、俺ホントは偶然なんかじゃないんです。ココに引っ越してきたのは」

私は彼の思いもしない言葉に振り向いた。

「何、言ってるの？」

「ココにセンパイが住んでるって聞いたから」

「何のために？　なんで私に近づくの？」

「センパイに会えたら一言おうと思っていた事があります。

俺、センパイの事———センパイの事が好きです。

誰も描く事が出来ないあの透き通った美しいブルーを描くセンパイを尊敬していました。

自分もいつかそんなブルーを描きたくて、だから、いつもいつも傍にいました。

でも、ある出来事で気づいたんです、自分の想いに。

あのキレイなブルーに近づけたら、伝えようと思ったけど、その前にセンパイは卒業してしまっ  
て、何も伝えられなかった———俺、今でも絵を描く事を続けています」

「そんな事……彼女、い」

「はっ？」

私の言った事に理解できずに困惑する彼は少し固まっていたが、次に迷いなくズカズカと私へと近づいて来る。

「……ついて来て下さい」

彼は私の腕を掴むと力強く引っ張っていく。

いつのまにやら、どこかの部屋の中につれて行かれて来られていた。

「これ憶えていますか？」

彼は一枚の大きな絵を私に見せてくれる。それは見覚えのある絵だった。

「憶えてるよ、展示会の時の」

「この絵、倒れてきてグチャグチャになったんですよね。当時パニックになった俺に声を掛けてくれたセンパイが、空の部分直してくれた絵です。あの時の真剣なセンパイの横顔忘れません。すごく、キレイでした。その時確信したんです。ああ、俺センパイが好きだなって」

彼の話でその当時の事がよみがえった。

それは私が高校三年の時――――

「君はもう少し人と関わりなさい。そうすればきっと今の絵に暖かさがでると思うんですよ」

「先生、私進学する事にしました。だから絵はもう描きません」

「……そうですか。残念ですが決めた事なら仕方ありませんね」

そう私は昔から人付き合いがうまくなく、独りが楽で、ずっと絵を描き続けていたのだ。

でも、そんな絵の世界も限界が訪れて私はすぐに諦めた。

そして、今もその時と変わらない自分がある。

彼はもう一枚、未完成の絵を出し来ると私に見せる。

――――小さな青い絵、海の絵だった。

でも、なぜか空の部分だけ真っ白のまま。

「センパイに会った日から、絵を描いていました。家に行かなくなったあの日から急いである人  
手伝ってもらい、空以外の部分は完成しました」

そう言って彼は写真立てに視線をうながす。

写真は彼の大学の卒業写真だった。

そこには、あの日見た女性が写っていた――化粧のせいでわからなかったが、よく見ると彼と全く  
同じ顔をしている。

「俺の事知らないんですね」

クスッと彼はそう言うといつものハニカンだ笑み。

「嘘……」

そう呟く私の手を彼がそっと手に取ると、強く握りしめる。

そして、私は誰かの為に変わりたいと。

変わらなきゃいけない。

-----初めて心から強く強く願った。

「一緒に、今からでも描けるかな？」

「描けますよ——今からでも、きっと」

思い出の絵と未完成な絵を見つめながら私も彼の手を強く強く握り締める。

-----この手を離さないように。